私は彼のつつましい崇拝者

陶工であり聖人であるゴーラは、パンダルプールに住む偉大な聖人たちを招集して、キールタンと討論をしようと決めました。そこに集まった人たちは、ゴーラ自身、金細工師のナラハリ、庭師のサウタ、ナームデーヴの召使いのジャナーバーイー、ニャーネーシュワラ、彼の兄弟であるソーパンとニヴリッティ、そして妹である偉大なヨーギニーのムクターバーイーなど、ほとんどは単純な労働者でした。

ゴーラが聖人たちを席に案内して敬意を示すと、ニャーネーシュワラは目をキラキラさせながら主人役に言いました。「あなたは皆の席に“つぼ”を置いたね。では、焼き上がったものと、そうでないものとを見分けてごらん」

ゴーラは即座に、ニャーネーシュワラの言ったことの意味を理解しました。彼はつぼ焼きの棒でそこにいる聖人の頭を一人ずつコツン、コツンとたたきました。全員が静かに座ってたたかれていましたが、ナームデーヴの番になると、彼は「何で私を打つんだ」と、いらだって叫びました。

「ああ」と、ゴーラは言いました。「このつぼはまだ焼き上がっていない」

すると、ムクターバーイーがいたずらっぽく言いました。「ゴーラ、あなたは老練な検査官ね。病気をたちどころに見つける医者のように、焼けているものといないものが一目でわかるなんて」。ムクターバーイーの言葉に聖人たちはドッと笑い声を上げました。しかし、ナームデーヴの繊細な心には、この侮辱は耐えられないものでした。

涙を隠しながらナームデーヴは座を立つと、寺院に駆け込んで神の像の前にひれ伏しました。「神よ」と、彼は涙を流して言いました。「私はひどい侮辱を受けました。私の心は怒りでいっぱいです」

ナームデーヴは神を心から信頼していたので、彼にとってその像はいつでも息をしていました。ですから、神は笑ってナームデーヴを抱き締めました。「誰がお前を侮辱したんだね」と、神は尋ねました。「私はお前の心の友だ。何が起こったのか話してごらん」

「あなたの信奉者のゴーラです」と、ナームデーヴは言いました。「彼が聖人たちの前で私の頭をたたいたので、向こうへ行けと言うと、彼は私を半焼けのつぼだと言いました。ムクターバーイーが私をからかって、聖人たちは皆で、ニャーネーシュワラまでが私を笑ったのです」

しばらくの間、神は沈黙していました。そして言いました。「ああ、いとしいナームデーヴよ、皆が言ったことは真実だ。グルの弟子でない者は常に未熟と言われるのだよ」

その言葉を聞くと、ナームデーヴは完全に打ちのめされてしまいました。「神よ、あなたが私を支持してくれないのなら、私は誰に守ってもらえるでしょう。もしあなたが他の人たちのように私を侮辱するのなら、一体どこに行けばよいのでしょう。もし母親が子どもを見捨てるなら、誰がその子の面倒を見るのでしょう」

「お前と私の心は一つだ」と、神は言いました。「私たちの間に二元性はない。このことに気づくために、グルの元へ行きなさい。大いなる師の祝福無しに、神と信奉者の間の二元性の感覚が無くなることはない」

ナームデーヴは、「でも、あなたがいるのになぜグルが必要なのですか」と叫びました。

「私の言うことを聞きなさい」と神は言いました。「私がラーマとして化身したとき、知識を得るためにグル・ヴァシシュタの元に行った。クリシュナとしては、サーンディーパニを訪ねた。誰にでもグルは必要だ。シヴァ・テンプルには偉大な聖人、ヴィショーバ・ケーチャールがいる。彼はニャーネーシュワラの弟子で、サッドグルの中で比類無き者だ。彼の元に行って教えを受けなさい」

すっかり意気消沈して、ナームデーヴはシヴァ・テンプルに向かいました。彼が扉を開けると、ヴィショーバ・ケーチャールがいびきをかいて寝ていました。足をリンガムの上に置いて横たわっていたのです！　ナームデーヴは自分の目を疑いました。これこそ侮辱の極みだ、神の象徴の扱い方も知らないような人間の所に自分は送られたのだ、と彼は思いました。

ナームデーヴはヴィショーバ・ケーチャールに近づくと言いました。「あなたは自分をサードゥだ、聖人だと言うが、シヴァ神の象徴に足を載せているではないですか。それがあなたのブラフマンの知識の価値なのですか」

ヴィショーバは目を開くと、にやりとして若者を見つめました。「マハーラージよ、あなたは正しい」と、彼は言いました。「私は大きな過ちを犯してしまった。それでは私を助けてくれないか。私の足を持ち上げて、シヴァがいない所へ置いてくれ。私はあまりに老いて弱いので、自分で足を動かすことができないのだ」

ナームデーヴはヴィショーバの足を持ち上げ、少し動かして地面に置こうとしました。驚いたことに、足を置こうとしたまさにその場所に、リンガムがぱっと現れました。再びヴィショーバの足を動かすと、そこにもリンガムが現れました。老人の足をどこに置

こうとしても、リンガムがあるのでした。ナームデーヴは驚嘆しました。愛の涙が彼の目からあふれ、彼はヴィショーバの優しい声を聞きました。「ヴィシュヌのバクタ（信奉者）よ、どうか私の足を下ろしておくれ」

「できません」と、ナームデーヴは言いました。「あなたの足を持ち上げると、突然シヴァがいたるところに見えるのです。彼のいない場所を見つけることはできません。ですから、あなたの足をどこに置いたらよいのでしょう」

「シヴァが現れる形に耳を傾けなさい」と、ヴィショーバは言いました。「彼の頭は天に届き、彼の足は地獄の底に届く。彼のあまねく広がる姿を説明できる者は、未だ誰もいない。そして私、ニャーネーシュワラのしもべは、彼のつつましい崇拝者なのだ」

ナームデーヴは床に身を屈し、グルの足に頭をつけました。ヴィショーバは彼の手をナームデーヴの頭の上に置き、そしてナームデーヴはサマーディに入りました。彼は心の中で、ヴィショーバがヴィタールの姿そのものであることを、彼のグルと彼の愛する神は一つであることを見ました。そしてナームデーヴにとって、彼自身と神との違いはないのでした。

それからは、彼がヴィタールについて話すとき、それはもはや寺院にある像のみでなく、彼があらゆるものの中に体験したあまねく広がる大いなる存在についてのこととなりました。

© 2016 SYDA Foundation. 著作権所有。